

【三谷恵子先生追悼文】

三谷恵子さん追悼

石川達夫

誰からも優秀だと言われ、誰からも一目置かれ、誰からもその死を惜しまれる人というのは、そうそういるものではないだろう。三谷恵子さんは、そんな人だった。

三谷さんは、日本ロシア文学会が初めて導入した学会賞——学会報告優秀賞——の第1回の受賞者(1989年度)になった。既に広島大学に勤めていた私は、いわゆる「東欧革命」が起きて自由化したチェコスロヴァキアに久しぶりに行って、チェコ語の「夏の学校」に参加したのだが、そこで偶然、米国ブラウン大学のスラヴ言語学者フィードラー・上田雅子さん——ちなみに私の高校の後輩に当たる——と同じクラスになった。彼女と雑談をしていて三谷さんの話しになった時、上田さんは私が読んでいない三谷さんの受賞論文を既に読んでいて、素晴らしい論文だと賞賛していた。専門分野の違う私は、専門を同じくする同世代のいわばライバルからそんな風に賞賛される論文は、本当に素晴らしいものなのだろうと思ったものだ。

三谷さんは、東大のロシア語ロシア文学科(現在のスラヴ語スラヴ文学科)で課程博士を取得した最初期——二年目——の人にもなった。私の世代の頃までは、教員も学生も、院生が博士論文を書くなどということは念頭になかったが、文科省からの圧力もあったのだろう、急に川端香男里先生が、博士論文を書いて課程博士を取得することが望ましいという「難題」を出され始めたのである。三谷さんは、そのような先生たちからの「難題」に真面目に取り組み、それを見事に達成した最初期の人だったのだ。しかも、三谷さんは留学先のザグレブ大学でも既に博士号を取得していたので、外国の大学と東大露文科の両方で博士号を——しかも別のテーマで！——取得した最初の人になった。のんびりやっていて、博士論文を書くことなど思いも寄らなかった私などにとって、それは驚きと刺激であった。

若き日に外国と日本の大学で2つの博士号を取得したということにも示されているように、三谷さんは大変精力的な人であった。しかし、体の方は必ずしも丈夫ではなかったようだ。確か、駒場の(教養課程の)時だったか、病気で一年間休学したと聞いた。その後も、何度か手術をするという話を聞いた。三谷さんは、机に向かって仕事をし始めると「根っ子が生えたようになる」とご自分でおっしゃっていたが、机に向かうとそんなに根気が続かず、よく外に行って体を動かすアウトドア派の私は、

あまり丈夫そうではない人がそんな風に根を詰めて仕事をしていて大丈夫なのだろうかと思ったものだ。晩年は日本ロシア文学会の会長と日本スラヴ学研究会の企画編集委員長の仕事で精力的にこなされ、東大の総長補佐も務められたという——しかも闘病しながら——のだから、驚きである。

三谷さんは大変優秀な人だったが、隙がなくて近寄りやすい人ではなく、偉ぶらず、どこか飄々とした所さえあった。懇親会では意外にお酒を飲み、決して酔っ払うようなことはなかったが、寛いでざっくばらんな話しもされた。既に私が神戸大学、三谷さんが京都大学に勤めていた時のこと、研究会の後の懇親会で私たちと亀山郁夫さんの三人が同じテーブルを囲んで話しをしていた酒席でのことだったと思うが、三谷さんは全く意外なことに「方向音痴」で外国へ行くときよく道に迷うという話をされた。それで私は、こんなに優秀な人にも弱点があるんですね、と感想を述べた覚えがある。三谷さんは物事を——恐らくはご自分のことも、ご自分の死病のことさえも——冷静で客観的に見る、非常に理知的な人だった。

最後の数ヶ月間、私は日本スラヴ学研究会の企画編集委員として一緒に仕事をしたり、三谷さんから次回の日本ロシア文学会大会の開催校を引き受けるように依頼されてそのための話し合いをしたり——コロナ禍のためもっぱらメールだったが——、割合頻繁に三谷さんとメールのやりとりをしていた。その過程でご病気のこと、病状が悪化していること、そしてついには「終活」を始めていることなどを知らされ、大変驚くと同時に、その精力的なお仕事ぶりから信じられない気がし、また無理をして仕事を続けているのではないかと心配もした。三谷さんからの最後のメールは2022年1月5日付けのもので、『週刊読書人』から私の『チェコ・ゴシックの輝き——ペストの闇から生まれた中世の光』の書評を依頼されて書き、1月14日号に掲載されることを知らせてくださったメールだった。その際、「字数が限られているため大したことは書けませんでした。ご容赦ください」と気を遣ってくださったが、私への気遣いもさることながら、掲載された書評は、深刻な病状で書いたものとは信じられない、明晰で視野の広い、素晴らしい書評だった。だが、それからまもなく1月17日に逝去されたという訃報が届き、「急逝」されたという感じでショックを受け、同時に、三谷さんが最後の最後まで精力的に仕事を続けておられたことに改めて驚嘆した。この書評が、三谷さんの絶筆になったのかもしれない。ちなみに私の本は、ペストがパンデミックとなって膨大な犠牲者を出し、ヨーロッパの社会と文化に甚大な影響を与えた中世チェコにおける死と不幸に関係する諸作品を論じて、「死と不幸を免れない人間には光と慰めが必要だ」という想念を込めた本である。自らの死を意識されていた三谷さんは、どんなお気持ちでこの本を読まれただろうか……。

三谷さんの研究と人となりについては、スラヴ言語学という専門分野を同じくし、学生時代からの研究仲間にして後には職場の同僚となられ、恐らく三谷さんに一番近

い存在だった服部文昭さんが、既にロシア文学会のホームページに「三谷前会長の早過ぎるご逝去を悼んで」という素晴らしい追悼文を書かれているし、やはり専門を同じくする後進の野町素己さんもスラブ・ユーラシア研究センターのホームページに素晴らしい追悼文を書かれている。私にできるのは、折に触れて三谷さんからうかがった個人的なことなどを、とりとめなく書くことくらいである。三谷さんのお家は意外にもお寺だったこと、香山リカ氏と同じく名門の東京学芸大学附属高校の出身であったこと、東大の駒場ではドイツ語クラスだったことなど……。

最後に付言すると、東大露文科で三谷さんは、特にロシア語学と（当時の）ユーゴスラヴィアの言語文化を研究されていた栗原成郎先生に学ばれ、恐らくは先生の影響のもとにスラヴ言語学の研究者を志し、先生と同じくユーゴスラヴィアの言語文化を専門的に研究し、ユーゴスラヴィアにも留学されたのだろう。栗原先生は、実に立派な後継者をお育てになったわけである。大変温厚な人格者であられる栗原先生にはお子さんがいないので、私は栗原先生がもしかして愛弟子の三谷さんを養子にしたいのではないかと勝手に想像したりもした。これほど優秀な愛弟子に、いわば「逆縁」で死なれてしまった栗原先生も、大変ショックを受けられたのではないだろうか……。

三谷恵子さんの現役での早すぎる死は、日本スラヴ学研究会にとってのみならず、日本のスラヴ研究全体にとって——更には恐らく三谷さんが国際的にも活躍されていた世界のスラヴ研究にとっても——大きな痛手である。我々としてはご冥福を祈るばかりだが、深刻な病気を抱えながらも最後まで精力的に仕事をこなされ責任を全うされようとした三谷さんを偲び、その遺志を継ぐべく活動を続けていくことを望みたい。

三谷さん、あんなに働き詰めで、さぞかしお疲れになったのではないですか？ しかし学究の鑑と言うべき、見事な学者人生でしたね。どうか安らかにお休みください。